様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2023
課題番号：１６Ｋ０２５０３

研究課題名（和文）19世紀アメリカ国民文化の形成における翻訳の役割

研究課題名（英文）The Role of Translation in the Making of Nineteenth-Century US national Culture

研究代表者
古屋　耕平（Furuya, Kohei）

青山学院大学・経済学部・教授

研究者番号：７０６１４８８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、十九世紀アメリカ文学における翻訳の役割に焦点を当て、国内外の学会で発表を行い、学術誌及び学術書に論文を発表した。主な成果としては、ナサニエル・ホーソーン『セプティミアス・フェルトン』に関する研究、マーガレット・フラーのドイツ語翻訳についての研究、ラルフ・ウォルド・エマソンとドイツ翻訳理論との関係についての論文がそれぞれ学術書に収録され、メルヴィル諸作品における翻訳の役割についての論文がESQ誌に収録された。COVID-19の影響で学会参加や調査活動が制限された2020年を除き、翌年以降も十九世紀アメリカ文学に関する研究を進め、学会発表や論文発表を活発に行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本のアメリカ文学研究の流れを踏まえながら、アメリカ文学の「国際的な視点」と「地域的独自性」を統合する試みであった。日本ではこれまで、アメリカのアカデミックな潮流を追随するか、あるいはアメリカ文学を日本近代文学の一部として再解釈する手法のいずれかが主流であった。本研究では、アメリカのアカデミックな基準に従いつつも、外国人としての視点を保持し、アメリカ国民文化の成立における翻訳の役割を探った。国内外での研究成果の発表を通じて、日本とアメリカのアメリカ文学研究の双方に新たな開かれた視点を提供し、異文化間対話の場を拡大することに一定の貢献はできたと思われる。

研究成果の概要（英文）：This research focused on the role of translation in nineteenth-century American literature, featuring presentations at both domestic and international conferences and publications in academic journals and books. Key achievements included a study on Nathaniel Hawthorne's Septimius Felton, research on Margaret Fuller's translations of German texts, and a paper exploring the relationship between Ralph Waldo Emerson and German translation theory, each published in academic books. Additionally, a paper examining the role of translation in Melville's works was published in the journal ESQ. Except for 2020, when conference participation and research activities were constrained due to COVID-19, research on nineteenth-century American literature continued in subsequent years with active presentations and publications.

研究分野：人文学

キーワード：アメリカ文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

二十世紀の単一言語的なアメリカ文学研究においては、アメリカ文学・文化の形成における翻訳や外国文学の重要性が長らく過小評価されてきた。しかし、2000 年代以降活発になったトランスナショナルな文学研究や世界文学研究において、国民文学の形成に翻訳が果たした役割について光が当てられることになった。

2000 年代以降のトランスナショナルな視点からのアメリカ文学の再検討作業は多くの成果を産んできたが、国際的な文学や文化の流通を可能とする条件としての翻訳が、アメリカ国家国民のアイデンティティ形成に果たした役割に注目した研究はそれほど多くなく、エリック・シェイフィッツ、ワイチー・ディモック、コリーン・グリーニー・ボッグス、ケイト・フーバーらが行なっているのみであった。特にアメリカン・ルネッサンス期の文学を中心に置く研究は、ボッグスの『トランスナショナリズムとアメリカ文学』以外に無かった。また、2000 年代後半から 2010 年代にかけて、ラテン・アメリカと十九世紀アメリカ文学の関係に着目した研究が隆盛を見るに至り、アメリカ文学の形成における翻訳の役割も改めて注目されるようになったが、スペイン語を除く諸言語から英語への翻訳についての研究はやはり限定的であった。

翻訳理論の分野では、1990 年代前後から大陸系ポストモダン思想や批評理論の流れを汲む、ガヤトリー・スピヴァックを始めとするポストコロニアリストの貢献が大きかったが、2000 年代以降、ローレンス・ヴェヌーティやエミリー・アプターらが翻訳についての理論的・歴史的研究の成果を活発に発表しており、またデイヴィッド・ダムロッシュらによる世界文学の研究も、翻訳理論の発展と密接に関わっていた。しかしながら、それらの研究はいずれも比較文学の分野に属し、本研究課題が対象とした創生期のアメリカ国民文学を正面から扱った研究は無かった。

また、アメリカ国民文学の誕生については、2010 年代に入り、ローレンス・ビュエル、ジョナサン・アラック、フィリップ・ギューラなどが、十九世紀における小説というジャンルの隆盛を中心に、二十世紀後半の政治的な文学研究、及び 2000 年代の世界文学研究の成果を踏まえた上で改めて本格的に論じているが、翻訳の役割については殆ど言及がなかった。

本研究は、以上のようなアメリカ文学研究の潮流を背景として、その合流点に自らを位置づけるものであった。

２．研究の目的

本研究は、アメリカ国民文化の形成に翻訳が果たした役割を明らかにすることを目的として行われた。独立期から十九世紀を通じてアメリカ合衆国が国家としてのアイデンティティを確立してゆく過程において、様々な形で外国文化の翻訳が行われたが、特に、本研究は十九世紀期半ば、いわゆるアメリカン・ルネッサンス期の文学作品のテクストを主な題材としつつ、その背景となる政治、歴史、科学、哲学、宗教の分野における様々な翻訳作業との関係について調査し、自由と民主主義を主導する国家としての合衆国のイメージが、外国や移民やマイノリティの文化や制度を、翻訳を通して輸入・変形することによって形成されていった過程を、近年の翻訳理論や世界文学やトランスナショナリズムの理論を援用して明らかにするものであった。

研究期間内には、ラルフ・ウォルド・エマソン、ナサニエル・ホーソーン、ハーマン・メルヴィル、マーガレット・フラー、ヘンリー・デイビッド・ソローのテクストの分析を行い、個々の作家のテクストにおける翻訳の概念や思想の全貌を明らかにすることを目指した。同時に、ニュ

ーイングランドの作家達に大きな影響を与えた、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーやカール・ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、シュレーゲル兄弟など、ドイツの作家や思想家の言語理論や翻訳理論の十九世紀アメリカ文学への影響について、その受容を促したアメリカの教育制度や、トーマス・カーライルなどイギリスの思想家兼翻訳家との関わりも含めて調査することも目的とした。十九世紀の女性作家にとって翻訳が社会参加の重要な機会であったことについてはマーガレット・フラーを中心に研究が少し行われているものの、同時代の女性知識人の翻訳思想についての研究も殆ど行われていない。近年、イギリス文学においてもジョージ・エリオットらの翻訳活動に注目した研究が行われつつあるが、女性翻訳家のトランスアトランティックな交流という観点からの研究もまだ発展途上である。

さらに、アフリカ系アメリカ人やネイティブ・アメリカンの作家や思想家のテクストについても、翻訳理論やポストコロニアル理論を導入することによって、新たな議論を展開できる可能性は大いにあると考えられたため、フレデリック・ダグラスやウィリアム・エイプスなどの、非標準英語（あるいは現地語）と標準英語のバイリンガルであるマイノリティー作家や思想家の翻訳思想、及びその作品との関係を精査することも目指した。

本研究では、翻訳に関する理論的な考察をさらに発展させることも重要な課題の一つとした。従来の翻訳理論や世界文学の理論においては、ヴァルター・ベンヤミン、ジャック・デリダなど大陸系の思想家やスピヴァックらポストコロニアリストによる哲学的及び政治的議論が大きな影響力を持っていたが、近年の認知科学、脳科学、進化心理学、言語学の発展に目を向けることによって、さらなる理論的発展が期待できると考えた。

３．研究の方法

本研究においては、前述の研究目的を達成するための方法として、（A）文献の調査、（B）文献入手のための実地調査、（C）一次資料の精読、（D）二次資料の精読、（E）学会発表による専門家のフィードバック、（F）論文発表を通じた専門家のフィードバック、の 6 点を主に採用した。年度毎に目標を定め、通常勤務のスケジュールと照らし合わせながら、最も効果的な作業工程を作成し研究を実行し、前年度の達成度と問題点をレビューしながら、次年度の目標を適宜更新した。

本研究期間中には、2020 年から 2022 年度の前半にかけて、コロナ感染症の世界的流行のために、特に海外における（B）と（E）については中断を余儀なくされ、その後は職場環境と個人的状況の変化によって海外渡航を伴う学会発表や実地調査を行うことが困難になってしまったため、主にオンラインによる学会参加やインターネットを通じた資料収集を行うことになった。また、2023 年からは ChatGPT を始めとする生成 AI の飛躍的な発展があり、翻訳研究や文学研究の理論及び実践に関する方法論にも大幅なアップデートが必要とされる可能性が生じたため、デジタル人文学分野の様々な手法を一から学び始めた。

４．研究成果

2016 年度の主な研究成果としては、2016 年 3 月に大韓民国の Hankuk University of Foreign Studies にて行った招待講演の原稿を元にしたエッセイを同大学出版の学術誌 *Journal of British & American Studies* 誌上に発表した。同年 6 月には、本研究と関連するアメリカン・ルネッサンス研究の論文「『頭を突き出した蛇のような疑念』――「セプティミアス・フェルトン」における歴史と情動」が収録された論文集『ホーソーンの文学的遺産―ロマンスと歴史の変貌』が出版された。同年 9 月には、「知のコミュニティ」2016 年夏季セミナーシンポジアム「18・19 世紀

アメリカと知のコミュニティの形成」において、「想像の世界文学共同体――マーガレット・フラーの『ゲーテとの会話 』翻訳」というタイトルの発表を行った。

2017 年度の主な研究成果は以下の通りである。2017 年 6 月、イギリスのロンドン大学キングズ・カレッジにて開催された国際メルヴィル学会において、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』を中心とする諸テクストにおけるドイツ翻訳理論との関連性、特にドイツの作家ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテの翻訳理論に対する応答についての口頭発表を行った。2017 年 11 月、マーガレット・フラーの伝記などで知られるピュリッツァー賞作家・研究者メーガン・マーシャル氏を招いて行われた広島大学の国際ワークショップではマーガレット・フラーのヨハン・ペーター・エッカーマン『ゲーテとの対話』の翻訳に関する発表を行った。また、2017 年 7 月、 2018 年 3 月にも、フラーのキャリアにおける翻訳活動の意義についてさらなる発表を行った。2017 年 12 月、2018 年 2 月には、本研究課題とも直接関連するアメリカ文学及びアメリカン・ルネッサンスにおける幸福の追求についての講演を、それぞれ明治学院大学と中央大学で行った。

2018 年度の主な研究成果は以下の通りである。2018 年 6 月、京都にて開催された国際ポー、ホーソーン学会において、南北戦争に関するナサニエル・ホーソーンのルポルタージュ作品と十九世紀半ばの写真メディアの勃興との関係についての口頭発表を行った。2018 年 7 月、ドイツ、ハイデルベルク大学のアメリカ研究センターにて開催された、国際エマソン、フラー学会において、マーガレット・フラーによるヨーハン・ペーター・エッカーマン『ゲーテとの対話』のドイツ語原文テクストの英語翻訳に関して、特にフラーとエッカーマンの伝記的な側面に焦点を当てた発表を行った。2018 年 12 月、ハーマン・メルヴィルにおける翻訳と単一言語主義の意味を扱った英語論文を、合衆国の学術誌 *ESQ* に発表した。2019 年 2 月には、マーガレット・フラーの翻訳活動に焦点を当てた論文を共著本の一部として、2019 年 3 月には、ナサニエル・ホーソーンの戦争ルポルタージュ"Chiefly about War Watters"と十九世紀半ばの写真メディアの勃興との関係についての論文を国内大学紀要よりそれぞれ出版した。

2019 年度の主な研究成果は以下の通りである。2019 年 5 月、日本ナサニエル・ホーソーン協会全国大会において、ホーソーンの短編作品「ウェイクフィールド」の「難しさ」についての発表を行った。2019 年 6 月、韓国外国語大学で開催された国際シンポジウム *Literature, Culture, and Technology: Translation in the 21st Century* において、マーガレット・フラーによるドイツ語原文テクストの英語翻訳に関して、特にフラーの翻訳活動とフェミニズム思想の関係に焦点を当てた発表を行った。2019 年 6 月、ニューヨーク大学にて開催された国際メルヴィル学会において、ハーマン・メルヴィルの『ピエール』における移民への言及に注目し、十九世紀ニューヨークにおける移民問題や労働問題、及び言語の問題に対する作家のアンビバレントな反応について論じる発表を行った。

2020 年度の主な研究成果は以下の通りである。まず、2020 年 10 月に予定されていた日本英文学会関東支部大会における、本研究者が司会発表を務めるアメリカ文学における移動・移民の問題をテーマとするシンポジウムがコロナ感染症の拡大により延期となった。次に、2020 年 12 月に予定されていた日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部大会における、十九世紀アメリカ文学と住まい、家に関するシンポジウム発表がコロナ感染症の拡大により延期となった。その間、2020 年日本英文学会関東支部秋季大会では大会実行委員を務め、オンラインによる学会の運営に携わった。こちらは、目に見えない部分ではあるが、アフターコロナの時代に研究活動を行う上での、知識と技術の習得という面では大きな成果を得た。

2021 年度の主な研究成果は以下の通りである。2021 年 11 月、日本英文学会関東支部大会におけるシンポジウム「十九世紀アメリカ文学における移動・移民」において司会・発表を務めた。

本シンポジウムでは、十九世紀半ばのアメリカにおける移動・移民をテーマとし、各発表における作品分析をケーススタディーとして、人やモノの移動がもたらす人々の意識の変化について、グローバル化と反グローバル主義、観光と開発、難民・移民・人身売買といった、現在まで続く様々な問題を考える上でのヒントを、パネル・ディスカッションを通じて探った。2021 年 12 月、日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部大会における、十九世紀アメリカ文学と住まいに関するシンポジウムにおいて発表を行った。本発表では、当時広く読まれた建築書である A.J. Downing の *The Architecture of Country Houses* を参照しながら、田舎暮らしを題材とするハーマン・メルヴィルの短編作品群における貧困と格差の問題について論じた。

2022 年度の主な研究実績は以下の通りである。2022 年末にリリースされた ChatGPT の文学研究や翻訳研究に対する影響についての研究を開始した。生成 AI の存在は本研究課題に対しても直接的・間接的に影響を及ぼすことは間違いないと思われたため、その利用方法について、デジタル人文学やコンピューター・サイエンスの論文を調査し、本研究課題に付随するアメリカ文学テクストの日本語訳に関する研究を行った。研究成果の一部は、2023 年 6 月に『青山經濟論集』誌上で発表された。

2023 年度の主な研究実績は以下の通りである。2024 年 3 月に、これまでに断続的に行ってきたエマソンの翻訳理論についての研究を発展させた論文が「ラルフ・ウォルド・エマソンとドイツ翻訳理論――ゲーテの影響を中心に」というタイトルで、共著研究書の一部として出版された。また、**ハーマン・メルヴィルの諸作品と 19 世紀半ばのコレラの世界的流行及びアメリカへの移民増加との関係について論じた研究をまとめ、** 2024 年 6 月発行予定の『青山經濟論集』のために提出した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 古屋耕平	４．巻 76(1)
２．論文標題 Herman Melvilleと十九世紀のコレラ流行	５．発行年 2024年
３．雑誌名 青山經濟論集	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古屋耕平	４．巻 75(1)
２．論文標題 ChatGPTの大学教育への影響 ： 外国語文学の授業の場合	５．発行年 2023年
３．雑誌名 青山經濟論集	６．最初と最後の頁 41-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古屋耕平	４．巻 36
２．論文標題 「合衆国の陰画――ナサニエル・ホーソーンの“Chiefly about War Matters”と戦争ツーリズム」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語文化	６．最初と最後の頁 150-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kohei Furuya	４．巻 64. 4
２．論文標題 “Melville, Babel, and the Ethics of Translation”	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ESQ: A Journal of Nineteenth-Century American Literature and Culture	６．最初と最後の頁 644-679
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1353/esq.2018.0022	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Furuya, Kohei	４．巻 37
２．論文標題 Translation and Classic American Literature: A Prospect for the Future of American Literary Scholarship	５．発行年 2016年
３．雑誌名 Journal of British & American Studies	６．最初と最後の頁 85-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　4件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Furuya, Kohei
２．発表標題 Herman Melville and the Nineteenth-Century Cholera Epidemics
３．学会等名 Department of English Language and Literature’s Education/Research Team for the BK21 Project Colloquium, Sungkyunkwan University（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 古屋耕平
２．発表標題 イザベルの歌―ニューヨーク、移民、コレラ
３．学会等名 日本英文学会関東支部
４．発表年 2021年

１．発表者名 古屋耕平
２．発表標題 持たない生活は可能か？―メルヴィルのカントリー・ハウス
３．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部
４．発表年 2021年

１．発表者名 古屋耕平
２．発表標題 「ウェイクフィールド」の難しさ
３．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会全国大会ワークショップ
４．発表年 2019年

１．発表者名 Furuya, Kohei
２．発表標題 Margaret Fuller's Translation of Eckermann's Gesprache mit Goethe: The Conception of Feminist World Literature
３．学会等名 Literature, Culture, and Technology: Translation in the 21st Century, the Institute of British and American Studies, Hankuk University of Foreign Studies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Furuya, Kohei
２．発表標題 Isabel's Immigrant Song: Different Origins of the City
３．学会等名 The 2019 International Melville Society Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kohei Furuya
２．発表標題 “Fuller's Translation of Eckermann's Conversations with Goethe: German Translation Theories and the Conception of Feminist World Literature”
３．学会等名 Transcendentalist Intersections: Literature, Philosophy, Religion. Heidelberg Center for American Studies, Heidelberg, Germany
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei Furuya
２．発表標題 “The Photo Negatives of the Nation: Italy, War, and Hawthorne’s Writings after 1860”
３．学会等名 The International Poe and Hawthorne Conference. Kyoto.
４．発表年 2018年

１．発表者名 Furuya, Kohei
２．発表標題 “Melville’s Conversations with Goethe: Representation, Translation, and Nation in Moby-Dick”
３．学会等名 The 2017 International Melville Society Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 古屋耕平
２．発表標題 想像の世界文学共同体―マーガレット・フラーの『ゲーテとの会話』翻訳
３．学会等名 「知のコミュニティ」2016年夏季セミナー、シンポジアム「18・19世紀アメリカと知のコミュニティの形成」
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

１．著者名 松本和也編、古屋耕平(分担執筆)	４．発行年 2024年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 232
３．書名 『翻訳としての文学――流通・受容・領有』「ラルフ・ウォルド・エマソンとドイツ翻訳理論――ゲーテの影響を中心に」15-46頁。	

1．著者名 神奈川大学人文学研究所編、熊谷謙介編著、古屋耕平(分担執筆)	4．発行年 2020年
2．出版社 青弓社	5．総ページ数 288
3．書名 『男性性を可視化する――〈男らしさ〉の表象分析』「男らしくない西部劇小説『シェーン』――冷戦期アメリカの核／家族」128-149頁。	

1．著者名 城戸光世、倉橋洋子、高尾直知、竹野富美子編、古屋耕平(分担執筆)	4．発行年 2019年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 361
3．書名 『繋がりの詩学』「想像の世界文学共同体――マーガレット・フラーの『ゲーテとの対話』翻訳」169-188頁。	

1．著者名 高尾直知、西谷拓哉、成田雅彦編、古屋耕平(分担執筆)	4．発行年 2016年
2．出版社 開文社	5．総ページ数 462
3．書名 『ホーソーンの文学的遺産―ロマンスと歴史の変貌』「『頭を突き出した蛇のような疑念』――「セプティミアス・フェルトン」における歴史と情動」421-43頁。	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関